今日のイラスト 632　「 イラストでたどる石州街道⑲　長門峡 」　　古谷眞之助

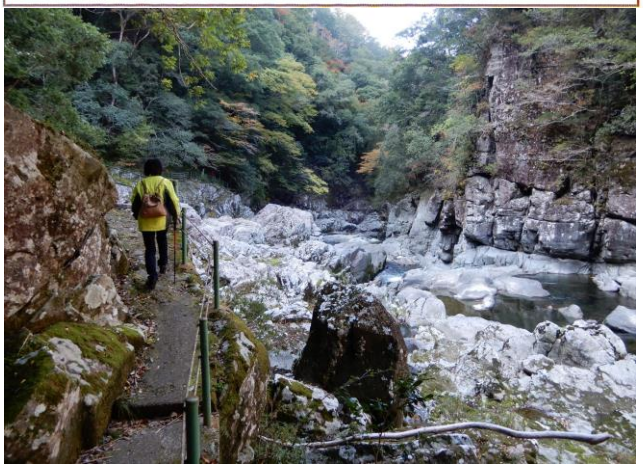
昨年の 11 月４日に長門峡を散策し、その時に、ほぼここと同じ場所からの眺めをイラストに描いた。それは No.560「初秋の長門峡」と題してお送りしているので気になる方は比べてみて欲しい。サンデー山口連載中の石州街道シリーズでは、やはり過去描いたものを使用してはまずいだろうと思い、当日撮影した写真を見直してみて、この付近が一番絵になるとの結論になり、前回よりも少しだけ上流部のシーンを描いたような次第である。

イラストでたどる 石州街道 19 長門峡

石州街道の終点、野坂峠付近は青野山火山群に属しており、これが数十万年前に噴火して津和野方面に流れる川を堰き止め、「古徳佐湖」が出現した。その後、長門峡を経由して湖水が萩方面に流れ出るようになると、湖は干上がって広大な徳佐盆地が形成された。つまり、長門峡がなければ石州街道の後半部を占める徳佐盆地は存在しなかったわけで、これを取り上げないわけにはいかない。石州街道沿いの長門峡駅がその入口である。

郷土の画家・高島北海が名付けたと言われる長門峡は、奇岩や滝、深淵等がいくつも続きそれが四季折々の風景の中に映える景勝の地である。しっかりした遊歩道も整備されているので、特に春秋の散策をお勧めしたい。

文・イラスト＝古谷眞之助



あの時は、下流の竜宮淵までの約5kmを歩いた。遊歩道は多少のアップダウンはあるものの、基本的には下流に向かって進んでいるので、気楽に行ける。道はずっと左岸に伸びている。この道を歩きながら、渓谷の美しいシーンを楽しみ、同時に「古徳佐湖」のことも思い出していた。野坂峠付近の野坂火山群の溶岩流が津和野方面への流れをせき止めて出来た古徳佐湖の水は、やがて阿武川の谷頭浸食によって長門峡に流れ出た、ということになるそうである。この谷頭浸食については地学には疎いので上手く説明しきれないが、ともかく徳佐盆地に溜まった水がその浸食によって長門峡を形成し、萩を経由して日本海に流れ出るようになったということのようだ。今後触れるが、石州街道はJR三谷駅と名草駅の中間点付近で山代街道と出会う。山代街道は萩から地福を経由して東進して安芸国に伸びる主要街道である。つまり石州街道は街道に関しては、山口で萩往還によって、また地福では山代街道によって萩と結ばれており、地形的には長門峡を経由して日本海に流れ出る阿武川によって萩と結ばれている、ということになる。遠い数十万年前の話とわずか400年前の長州藩の時代とを同時に説明しようとすると頭がこんがらがってくるが、次回以降は街道に戻って近世時代の話に戻すことにしよう。（2023.10.31　記 ）